センター通信

（第52号・53号合併号）

北京日本学研究センター　Tel：68424893（中国側事務室）：68415630（日本側事務室）

1996.6.1　責任編集：稲村哲也　呉咏梅

ニュース

◆４月１６日（火）◇第１回文学コース研究会が開かれた（以後毎週火曜日に開催）。

◆４月１８日（木）◇今学期第２回目の公開講座が基金北京事務所ホールにおいて開催され、正岡先生が「現代日本における結婚事情」というテーマで講演。

◆４月２１日（月）◇厳安生主任が国際日本文化研究所での訪日研究を終え帰国されたことを祝賀し、同時に草薙裕先生の還暦をお祝いして、北外大の専門家食堂二階において盛大なパーテイを開催した。派遣教員と家族、中国側教員・スタッフ、客員研究員、研修生、学生のみなさんが参加した。

◆４月２５日（木）◇第３回公開講座が開かれ、河合先生が「異界を描く―中世絵画に見る異国の表現」のテーマで講演。

◆４月２６日（金）◇当センターの研究活動を活発化させるために、言語・文学・社会・文化の４つの研究室を基盤にして北京日本学研究センター研究部を設立するため、厳安生主任が主導した第１回会議において「研究室活動草案」について検討し、北京を中心に学術協力のネットワークを作り、共同研究のプロジェクトを企画し、その共同テーマによって客員研究員を招聘する主旨などを提起した。

◆５月９日（木）◇第１回文化コース研究会が開かれ、代田先生が「中国文学研究会と竹内好」のテーマで発表。

◆５月１０日（金）◇第１回言語コース研究会が開かれ、草薙先生が「日本語のテンスとアスペクト」のテーマで発表。

◆５月１６日（木）◇第４回公開講座が開かれ、池内先生が「白樺派の文学・読みの試み―木下利玄『お京』をめぐって」のテーマで講演。

◆５月２２日（水）◇第１回社会コース研究会が開かれ、客員研究員が中間発表の予備発表を行った。

◆５月２３日（木）◇第５回公開講座が基金北京事務所ホールにて開催され、山野先生が「都市再開発と景観」というテーマで講演。

◆５月２４日（金）◇客員研究員の中間発表が行われた。言語・文学、社会、文化の３つの組に分かれて、それぞれの研究課題について発表をした。◇北京外国語大学外事処の主催による北京西郊外妙峰山への見学が行われた。

◆５月３０日（木）◇第１１期生の修士論文の第１回中間発表が行われた。

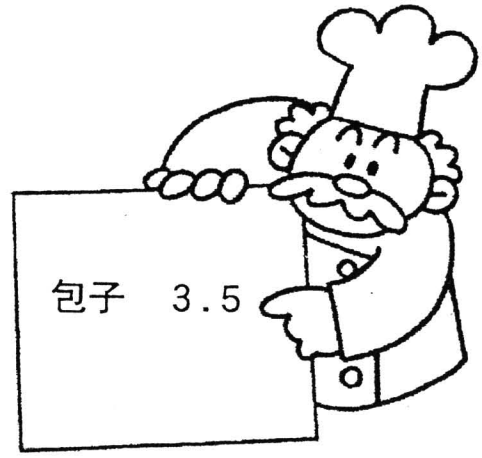
◆５月３１日（金）◇第２回言語コース研究会が開かれ、小川先生が「延慶本平家物語における漢字仮名交じり表記」のテーマで発表。

自己紹介

河野元昭　東京大学文学部教授

河合正朝さんのあとを引き継いで5月8日にやってまいりました。僕は7年まえにもこの研究中心にお世話になりました。中国の新しい世代に会えるのを楽しみにやってまいりましたが、僕にとってはやはりセンチメンタル・ジャーニーでもあるのです。北京の変貌ぶりはそれをなかなか許してくれません。しかし、たとえばそのときに親しくなり、また僕の中国語の先生ともなってくれた南工字楼や専家食堂の服務員―実に7人もの―と再会すれば、懐かしくないはずがありません。懐かしいといえば、このあいだ西単の慶豊包子を再び訪ねてみました。7年まえ到着してすぐ、案内書に載っていたので、庶民の店としてよく知られたこの食堂に出かけてみました。お昼どきで長蛇の列ができています。まえの

人に、わずかに知っている中国語の「多少銭？」を発してみると、何か答えてくれるのですが、聞き取れたのは「3クアイ5」だけです。数字と方位だけは、すでに長年の蓄積があります。僕は日本の中華饅頭を思って、3つ食べようと、10元5角を出すと、一皿に15個づつ六皿、90個の包子が並べられたのです。あとで分かったのですが、3クアイ5というのは1斤の値段だったのです。いまは店も綺麗になり、机と椅子が用意され、生ビールまで飲めるようになっています。窮状を救ってくれた英語のうまい青年と、騒然とした店の隅でせかされるように食べた7年まえの雰囲気は、もうほとんど残っていないのですが、中国の人の健啖ぶりはまったく同じなのでした。



訪日体験--津山の農業事情

黄咏嵐（第9期卒業生、中国人民銀行北京市分行勤務）

私は修士論文の調査のため、５月１日と２日に岡山県津山市の兼業農家のAさんの家を訪ねた。彼女の家は小さい山の上にある。三世代の家族で、上にお爺さんとお婆さん、下に３人の子供がいる。Aさんは中央病院の看護婦をし、ご主人は農協に勤めている。３人の子供のうち、長男は２８才で、一度就職をしたあとまた伊勢市の短大に入り、親と離れて勉強生活を送っている。長女は今年大学を卒業したばかりで、就職活動の最中でがんばっている。できれば県外に就職したい、県内なら岡山市にと本人は話している。

Aさんの家は二階建ての住宅と駐車場、農業機械置き場としての大きな倉庫、別棟のトイレなどに分かれている。耕地面積は約1.2ヘクタールで、住宅の後ろに竹の山ももっている。先祖代々のお墓も近くの山の上にある。

農地での田植えの準備はまだしていなかった。田圃にはすでにとうがたった白菜などが見られた。「そのうち、２日もあれば田植えはできる」とAさんは言う。

住宅の中には農家独特の匂いが漂っている。部屋は整頓されておらず、勤めから帰ってきてからのAさんの苦労が想像できる。一週間のうち唯一くつろげるのは、テレビの時代劇『吉宗』を見るときだけだと言う。

農作業はAさんとお爺さんの仕事である。また、お婆さんはほとんど家事に手を触れず、かえってお爺さんのほうが毎日洗濯をしている。倉庫には、手押し式耕耘機、乗用型田植機、コンバイン、トラクター、脱穀機など農機具がたくさん並んでいる。利用効率は悪いが便利なことは便利である。

Aさんは農家の生活に生まれながらの愛着をもっている。昔は牛を飼ったり、家の庭で鶏を飼ったりしていた。しかし、機械化の進行のために、田圃に牛の働く場がなくなり、乳牛も輸入牛肉に圧倒された。鶏の方は面倒を見る手間がなく、山の狐に食べられてしまった。結局、残っている動物はプーニャンと呼ばれている猫だけである。子供が同居していないAさんにとって、プーニャンは精神的な慰めである。どんなに忙しいときでもプーニャンの世話だけは忘れない。

Aさんの農地にできた米は自分の食べる分以外は全部農協（農業協同組合）に供給す

る。野菜、果物、山の産物なども近所の人に贈るか、漬け物にするだけで、全く売ろうとしない。売ってもあまり儲からないし、売る時間もないという。農業は仕事というよりも精神をリラックスさせるものだという。

住宅の中にも食糧貯蔵庫があって、２年分のお米、自慢の漬け物（白菜や大根）などが置かれている。野菜の食べ方といえば非常に贅沢である。柔らかい部分だけを食べ、それ以外は全部捨ててしまう。私も農家しか享受できないその贅沢な生活を二日間だけ過ごした。

住宅にはガス管が配置されていないが、ガス・ボンベが屋外に置かれて生活用の燃料を提供している。そのため、昔の薪が住宅のうしろの小屋に積んだままになっている。住宅は南向きの二階建てで、台所を境にして、老夫婦の住むところとそうでないところを分けている。一緒に食事をすることは家族の楽しみだと思うが、Aさんのいえではむしろばらばらにする。お爺さんたちは就寝が早いので、先に食事を済ませる。

病院勤務、農作業、家事など沢山の仕事の中でがんばっているAさんには全く頭が下がる。兼業化は物質的な豊かさを実現したが、女性に与える負担は決して少なくない。総兼業化の中で、農村社会が変化してゆくことを実感させられた。

特集・中国事情（学生・卒業生の投稿・レポートより）

都市における中国の住宅事情--無限需要と有限供給

蘇鳳鳴（第9期卒業生、社会科学院家庭室勤務）

北京日本学研究センターを卒業して中国社会科学院に勤務し、最初に取り組んでいる課題は住宅政策である。そこで、この紙面を借りて、中国の住宅問題の現状について簡単にご報告したい。

都市の住宅事情は益々悪化している。結婚して十何年経っても狭い部屋にしか住めない例がありすぎる。二世代で10㎡のうさぎ小屋で生活している人も多い。一方では、家族成員が少ないのに、何軒もの住宅をもっている高官や権力者もたくさんいる。政府は何度も住宅改革を試みてきたがうまくいっていない。中国の都市住宅問題を一言でいえば、「無限の需要と有限の供給」につきる。

まず、無限の需要であるが、以下の諸要因があげられる。

(1)都市人口のはなはだしい増加と家族の小型化--中国では厳しい戸籍制度をとっているが、都市の戸籍を持てば就職・住宅の面で特別扱いを受ける時代があり、現在でもある程度存在している。これは、都市人口（戸籍所有者）の増加の一因であろう。1949年末には9,441万人であった都市人口が1989年末には2億900万人にも達している。2000年には3億5,200万人になると予測され、また5億人になるともいわれている。さらに、家族の小型化により、戸数の増加率はより高くなっている。

(2)1人当たりの居住面積の増加--解放当初1人当たりの居住面積は4.5㎡だったが、1990年には7.1㎡になった。これも需要拡大のひとつの要因である。

(3)改築の必要性--現在全国には500万㎡の危険な住宅、6億㎡の建て直しが必要とされる住宅がある。これも住宅需要を膨らませている。

以上のような要因による無限ともいえる需要に対し、供給は限定されている。その要因としては次の点があげられる。

(1)政府の投資規模が限界--中国の住宅投資がGNPに占める割合は極めて大きくなっている。1949-1978年の平均が1.50％であったのに対し、1982年以後の平均は7％台である。しかも、この規模で住宅を建設していったとしても、「2000年には1人当たりの居住面積を8㎡にする」という政府のスローガンは達成できない。
(2)不動産業者による住宅建設--今までの政策では、一般大衆は不動産業者が建設する住宅には目もくれない。それはあまりに高額で、一般の給与所得者が借りたり、買ったりすることはほとんどできない。また仮に買える値段であるとしても、給与所得者は、辛抱強く待てば「単位」から住宅を供給されるので、買う気も起こらない。
（3）住居の回収不能---一旦配分された住宅の使用権・使用期間が不明確なため、住宅を回収して再分配することは事実上できない。親に配分された住宅に子供や親戚が住んでいるというような現象は極めて一般的である。
以上のような需要と供給の要因により、中国の都市住宅問題は、量的な不足と配分の不公平とにおいて深刻な状況にあるといえよう。

中国の春節（1）「帰郷日記から」（山東省済寧市）

李偉（第11期生・言語コース）

2.13（農暦12月25日）
今年、父は商売はしないで、ほとんど外にも出ませんでした。家で何もしないのも退屈なので2頭の豚を飼いました。春節が近づき、だいたい100kgぐらいになったんです。私の家族は大家族で、肉が好きな人も多い。こういうわけで、肉を買う代わりに、一頭の豚を殺しました。私は初めて豚を殺すので、殺すとき心がどきどきして、なんか思わず悲しい感じがしてきました。しかし、家族の他の人は誰も悲しいとは感じないようです。その反対に、みんな楽しく手伝っていました。とくに子供たちは、十分に肉を食べられると思っているから、踊ったり歌ったりして、庭ににぎやかさがいっぱいです。

2.14（農暦12月26日）
12月28日が母の誕生日ですから、早めに掃除や春節料理を準備しなければなりません。だから、この日午前、しっかり部屋や庭を掃除して、きれいになりました。私はいつも都会に住んでいますから、清潔の習慣を養いました。そういうわけで、私はこっちもあっちも掃除して、隅々までやりました。とても疲れた一日でした。
2.15（農暦12月27日）
この日は両親が一番疲れました。春節期間用の料理の材料を用意したりしたからです。例えば、野菜を洗ったり、肉団子を油で揚げたりしました。一番疲れたことはやはり水餃の皮を作ることでしょう。牛肉や豚肉を細かくするのに機械がないので、ただナイフで割ったり切ったりして、疲れるのです。その日、私は近所のお風呂に行きました。そこに

は幸いにシャワーがあって、簡単に体を洗いました。

2.16（農暦12月28日）

この日は母の誕生日です。故里の習慣では、朝、母がうどんを食べることになっています。なぜかと言えば、うどんは長いし、折れにくい、そういう意味で、ぴったり寿命が長いことを象徴しています。しかし、母はいつもいつも「自分は若い若い」と言います。そんなに必要がないと思っているので、うどんを食べるのはやめることになったんです。午前、兄、兄嫁さん、姉、姉の主人などが来て、一緒に食事をしました。母がすこしお酒を飲んで、楽しく自分の54才の誕生日を過ごしました。

2.17（農暦12月29日）

春節の準備はほとんど2.15までにやりました。2.16もにぎやかに遊んで過ごしました。連続の労働なので2.17は休もうと父が提案しました。しかし、そう言いながら、母は休まず、台所を掃除しました。父もこっちへ行ったりあっちへ行ったりしていましたが、何をしているか私には分かりませんでした。私はずっとおもしろいテレビ番組を見ていたからです。

2.18（農暦12月30日）

今日は1995年最後の年で、中国の風俗では大団結の日です。家族全員11人が集まって、一緒に水餃を作ったり、料理をしたりしましたが、そのとき、老若男女にかかわらず、みんな手を出して何かをやりました。一番面白いのは、二番目の兄の娘はまだ3才なのに水餃が作れます。

午後、食事後、お墓へ行って、祖先の霊を家に迎えてくる時間です。一番目の兄は父が紙で作った紙のお金を持ってお墓へ行きました。お墓で紙のお金を焼いて、爆竹をしてから帰りました。帰ると、母はすぐ小麦の皮の粉を門のところに撒きました。今になって私はやっとそのわけを分かるようになりました。小麦の皮の粉を撒くので祖先の霊は家を出られなくなると言われています。

夜は一番楽しい時です。例年のように、ほとんどの人たちはテレビの前に座って、年一回の全国文芸演奏会を見ました。この演奏会は1996年の1日の2時まで続きます。男たちは大体お酒を飲みながら見ます。女たちは大体水餃を作りながら見ます。番組のことを話したり、1995年一年中の面白い話をしたりして、笑い声が時々出てきてとても楽しい雰囲気でした。このようにして、旧い一年を送って、新しい一年をまた迎えます。

2.19（農暦1月1日）

今日は新年の初めの日です。昨日の夜、私は3時頃に寝て5時半頃に起きました。起きてから、顔を洗ってはいけないし布団を片づけてはいけないと、何度も両親に告げられました。まだ悪魔が家にいるので危ないということです。それから、天の神、地の神の位牌の前で、紙のお金を焼いて、男と女は別々に額ずきました。そのあと、李氏家族（チャーズー：父系氏族のこと）の祖先の位牌の前で同じことをやりました。このふたつのことをしてから、長い爆竹をしました。そのあと、悪魔が追われてもう家を出ていって、天の神と地の神の祝福をもらいましたので、すべてができました。

夜が明けると、私と二人の兄と親しい関係を持っている李氏家族の他の人たちと一緒に、輩（世代）の高い人や、年をとった人の家へ行って、新春の祝賀のことばを表しました。そのように3時間くらい続けて、とても疲れました。でもとても楽しかった。

中国の春節（２）「北京の春節」

張彦麗（第11期生・文化コース）

春節を過ごすというのは中国語で「クオニエン（過年）」ともいう。餃子を作ったり、廟縁日に行ったりするのは「過年」の伝統的な習俗である。しかし、春節の過ごし方もだんだん変わってきた。今年の北京の春節で昔と違うところは主に以下の3点である。

（1）除夜の団欒――一家族が集まって餃子を作ったりしながら徹夜をするのは伝統的な習慣であるが、今年は一家団欒の場所は自分の家からホテルやレストランに移された。これは、もちろん市民の生活水準の向上や消費観念の変化と大きな関連がある。

（2）贈り物--昔は食べ物が中心で、お菓子や酒、果物などを贈るのがよくみられたが、今は花や上質装丁の本がずっと人気がある。つまり、贈り物の物質的価値より精神や文化が重視されるようになってきた。

（3）娯楽--家でマージャンをやったり、テレビを見たり、縁日に行って遊んだりする人もいるが、カラOKやディスコの流行につれて、カラOKバーやディスコに行って歌ったり踊ったりする人が非常に多くなった。

以上のように、春節の過ごし方も、中国の経済発展にともない、伝統的習俗が簡素化され、都市化の色彩が一層濃くなってきている。

新居への引っ越し儀礼（広西チワン族自治区欽州市）

刁 榴（第11期生・文化コース）

冬休みの1月28日、私の兄が新しい家に引っ越した。そこで、私は面白い儀礼を体験することができた。

まず、引っ越しの日を決めるのに、お金を払って儀礼の専門家に吉日を選んでもらった。それが1月28日と決まると、それ以前には絶対に新居に住んではいけないとされた。だから、私たち親類は霊山県から1月27日に来たが、みなホテルに一泊した。27日夜は、「斥屋」という儀式が行われた。夜8時に、雇った専門家が新居に来て、二階の正庁（正面の部屋）で桃ノ木で作った机と剣を置いた。机の上に酒、茶、煮た鶏（まるのまま）、豚肉、印鑑を置いた。その専門家は変な衣服と帽子を身につけ、早口で奇妙な言葉を話し始めた。私は一生懸命聞いたが、どうしても聞き取れなかった。そして、部屋ごとに豆をまき、桃の木の剣で部屋のドアをたたき、それからその部屋を閉じた。

28日の8時が吉時とされた。その日はみな早く起きて、引っ越しの準備をした。家具などは門前に置いて、赤いトゥイリエン（対の祝札）を貼っておく。8時になると、爆竹を鳴らし、一斉に家具などを運びこんだ。その後、三日間は掃除が禁止され、灯明を燃やし続けなければならない。それまで、引っ越しの儀礼が続くわけである。

文化記号論で読む中国（1）「中国人の服装感覚の変遷」

張彦麗（第11期生・文化コース）

<はじめに>

「人間にとって、一定の文化的な価値を持つものはすべて記号であり、また人間には、もともとコミュニケーションしていないはずの対象までコミュニケートする記号として見立てることができるとすると、われわれは文字通り『記号らしきもの）』に取りかこまれ

て生活しているになる。」[注1]　その意味で、私たちと記号としての「私たち」も、この記号化された世界に存在している。これをもっとも簡単かつ適切に説明できる例は服装であると思う。だから、私はこの文章で、新中国成立以後の服装感覚の変遷を通して、中国人[注2]の服装が表す共示義の具体的な内容の変化とその要因を論じたいと思う。

<本文>

衣服は「人」の社会的記号である。経済や技術の発展にともなって、衣服はその本来の有用性を越えて微妙な存在となってきた。毎日の生活の中で人は衣服をつけた「人」にだけ出合い、衣服を通してのみ他人を理解する。したがって、「服装におけるほど自己の人格が他者の目によって占領されている『人』の姿を明示しているものはない」と言える。建国後の中国人の服装感覚の変遷を見れば、服装の表示義から共示義へ重要性が移り、しかも、共示義の具体的な内容が年代によってそれぞれ違うという特徴があげられる。以下は時代順にその変化の様相を述べたいと思う。

(1) １９４５-１９５０年代

この時代のもっとも代表的な服装は人民服である。色と言えば紺、黒などのような重いものが大きな比率をしめている。デザインは素朴簡素であり、実用性が重視されている。その要因を考えれば、物質の欠乏にあり、国民の購買力の低下にあることはいうまでもないが、当時の統治思想またそれによって形成される社会心理にも関係している。「質素でよく苦難に耐えることは美徳である」とか、「すべての労働者は国の主人である」とか、平等というよりむしろ平均主義の考えが盛んであったために、服装の様式や色彩も非常に単調で、しかも無性別的、無個性的な特色を表していた。この特色は1970年代末ころまで続いた。

(2) 1960-70年代

60年代に新登場するのは緑色の軍装であって、いわば中国人が「板緑」というものである。人の心を落ちつかせないような緑色と堅苦しい様式を組み合わせが、その時代の混乱した社会状況を反映している。つまり、この時期は、平均主義的な思想が続いているどころか、むしろ文化大革命によって一層絶対化されたと思う。革命に対する盲従と「宗教的」情熱がこの緑のブームによく表れている。ある意味で、服装の単調化は人の思想の単純化によるものだと言ってもいいであろう。それは、1970年代末まで持続した。

(3) 1980年代

80年代に入ると、経済の発展と思想の解禁にしたがって、服装の様相や人々の服装感覚はずいぶん変化した。ファッション概念が登場し、それが速やかに人々の心をとらえた。デザインの新奇感や個性化と色彩の豊富・多様化の追求がこの時代の主な特徴である。それにしたがって、ファッション産業もめざましい発展を遂げた。

(4) 1990年代

90年代は80年代の特徴が続くと同時に、ブランド意識

注1　池上嘉彦他：p.43

注2　ここでの中国人とは、中国大陸の中国人を指し、香港や台湾は除外する。

の導入と定着により、ファッション界に新たな気風がでてきた。つまり衣服を買うのに、その有用性だけでなく、ブランドによる信頼感、他の人とは違ったものを求めることによる一種の優越感、満足感などの心理的価値を追求するのは普通のことになった。

<おわりに>

以上の述べたように、建国後の中国人の服装感覚の変遷は次の三つの段階を経験した。

(1) 実用性と均一性を強調する段階

(2) 実用性より非実用的価値（ファッション）を重視する段階

(3) 非実用的価値が強調され多様化・差異化する段階

中国人の服装感覚の変遷を考察することにより、以下の結論を導くことができる。

1.服装は物的な側面（有用性）と文化的な側面（芸術、個性表現、差異化などの多様な記号性）の二重の意味をもっている。

2.服装の共示義、すなわち文化的意味は、時間と空間によって異なる。

3.服装の共示義の変容は、思想や政治制度などの文化的背景とも密接に関係する。また、その根本的要因として経済の発展がある。

<参考文献>

池井望1987「現代人の服装感覚」ジュリスト増刊総合特集No.20『日本の大衆文化』

池上嘉彦他1983『文化記号論への招待』（有斐閣）

星野克美1985『消費の記号論』（講談社）

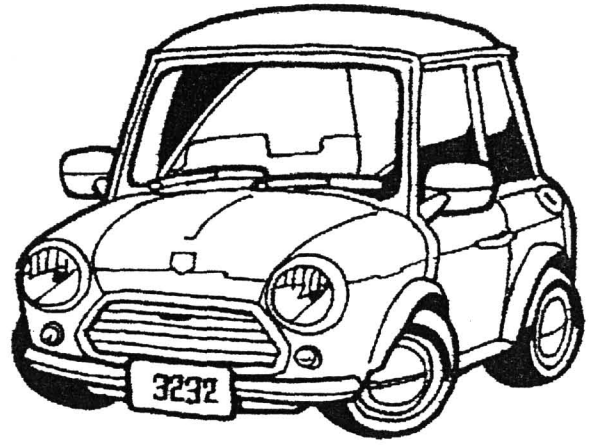
文化記号論で読む中国（2）ステータスとシンボル

寒心浩（第11期生・社会コース）

社会は、財産、学歴、出身、職業などの諸指標の混合物である様々な身分・地位をもつ人々によって構成されている。そして、身分や地位は、私たちが意識するかどうかは別として、しばしばシンボルによって表現される。

中国の封建時代の皇帝は龍の図案が描かれた黄色い服を着て、自分が最高権力者というメッセージを全国民に示した。黄色は皇帝の高貴な身分・地位を表象する。

今の社会は身分制が社会の隅々まで浸透していた時代とは異なる。だが、人々は以前とは異なる身分や地位をもっているため、ステイタスを象徴するシンボルが消えたわけではない。北京の街を歩くと、様々な服装が目に入る。緑色の服は軍人で、スポーツ着は学生、背広はサラリーマンや公務員である。同じ背広でも、金持ちが着るのはワンセット何千元の銘柄品で、低収入の会社員のは何百元の安物である。彼らの背広は、経済力を表すシンボルとなり、その地位や身分を他者に示してしまう。



シンボルは人間のステータスの表示に使われるが、一方でステータスを隠すためにも活用される。中国は社会主義国家なので国民全体の平等と差別の撤廃が常に求められる。すべての国民が差別なく国家の主人公であり、幹部と労働者の間には職種以外の違いがあってはならない。そのようなイデオロギーを破

らないように、トップクラスの人たちも一般の国民と同じような服装や食事や話し方をする。すなわち、シンボルによって、人は異なるステータスを隠し一種のフィクションを作り出す。いま中国では「反腐敗」のスローガンがよく話題にのぼる。腐敗行為は摘発されると重罪に処される可能性が高い。そこで、ある会社や役所の幹部は、高価な服は箱にしまって、古い物で通勤する。また、官庁の幹部たちが高級車を売却し月並みな乗用車にかえて、自分の廉潔さを民衆に示す、というようなニュースをしばしば耳にする。かれらは、シンボルを巧みに利用して、自分のステータスを漠然化するわけだ。

このように、私たちの身近な事物は、私たちの生活の実用的役割を果たすだけでなく、記号性をもち、何らかのメッセージを発しているが、それは、人々のステータスを表したり逆に隠したりするという重要な機能も果たしている。

自己紹介

研修生

曲志強　福建省廈門大学

出身地は山東省の済南市で、1982年に山東大学外国語学部日本語科を卒業しました。日本語の教師として強く感じたことは、日本語科の卒業生は言語はある程度できますが、社会文化的意味と日本民族に対しての理解はとても足りないということです。それが言語使用上のいろいろな問題の原因の一つです。日本民族と中華民族の交流の重要な役目を果たす人として、それはたいへん重要なことだと思います。学生の日本社会文化の知識を強めることに対しては、まず教師自身を高めるべきです。この考えから私は日本社会文化の授業も受けています。社会文化から、中日両国の比較から、世界的視野から日本を認識して理解することは、自分の興味でもあり、日本語教師としての責任でもあると思っています。

陳玉泉　福州大学外国語学部

1963年に福建省で生まれ、農村で少年時代をおくり、1982年に北京外国語学院に入学しました。卒業後旅行会社に勤めましたが、3年ほど前から福州大学外国語学部で教鞭を取っています。10年を経てまた母校で勉強するのは、苦しいことでも、嬉しいことでもあります。苦しいのはまた教室でずっと座って勉強すること。嬉しいのは、また母校の先生たちにお会いできたことです。また北京日本学研究センターで立派な先生の授業を受けるのは本当にありがたいことです。時間は短いですが、これからの教育の中で大きな役割を果たすでしょう。研修期間に全国各地の大学のベテランの先生と知り合ったり、新しい友達ができたりするのも得難いチャンスです。趣味はバスケットボールと卓球です。

栄樹艶　内蒙古蒙医学院

1963年内蒙古東部の通遼市生まれ。顔がモンゴル人に似ていますが、モンゴル人ではなく漢民族です。主人はビジネスマンで、6歳の男の子がいます。1988年内蒙古大学外国語学部を卒業してから、内蒙古蒙医学院で公共課として日本語を教えています。学生はほとんどモンゴル人です。卒業してからもう8年になりますが、3年ごとに繰り返して五十音図から教えるので、自分の日本語のレベルがなかなか上達せず、逆に下がるような気がします。そのため、チャンスを生かして北京日本学研究センターで研修することにしました。日本語の文法と慣用語はとてもややこしいですが、私は日本人の衣・食・住に興味をもっています。

呉偉　西南師範大学

親は私に大きな希望を抱いて、偉大の「偉」をつけたのだろうと思っていますが、それと反対に普通の人です。発音が日本語の「語彙」と同じなので、友達はいつも中国語の「　　」で呼んでいます。1962年四川省内江の生まれ。内江は砂糖で有名です。高校を卒業して先生の勧めで、重慶にある四川外国語学院の日本語学部に入りました。そのとき、日本語はどういうものか知りませんでしたが、勉強すればするほど興味が湧くようになりました。卒業してから、同じ都市にある西南師範大学の図書館に勤め、日本語の教師になる望みが水の泡となりました。1年間、北京大学で図書情報についての研修を受けました。そして10年間ぐらい図書館に勤めながら、図書情報部で授業をしていました。それは日本語と全く関係のない仕事で、残念

なことでした。一昨年転職して日本語の教師になり、長年の夢がとうとう実現されました。重慶は私にとって第二の故郷といえます。もう17年住んでいます。故郷とちょうど同じくらいです。

張衛寧　山西大学師範学院

山西省太原市の生まれで、1983年に山西大学外国語学部日本語科を卒業しました。今は山西大学師範学院外国語学部に勤めて、日本語を教えています。日本語の中で最も興味を持っているのは敬語と副詞です。対者敬語（丁寧表現・謙遜表現）と素材敬語（主体敬語表現・受け手敬語表現）などの敬語表現からいかに日本人の心を理解するかは大変面白いと思います。私の趣味は読書・歌・書道などです。日本語の仮名の発音は皆開音節で、歌を歌うときは非常にやさしくてきれいなので、日本の歌が大好きです。今度北京日本学研究センターで勉強できるようになったのは、幸運なことだと思います。自分自身の日本語のレベルと授業のレベルの向上のため一生懸命に勉強しようと思います。

張敏　四川外国語学院

山の城―重慶からまいりました。1993年四川外国語学院を卒業し、母校に残って日本語の教師になりました。これまでの日本語の勉強は不十分なので、仕事についてから3年目に北京日本学研究センターの研修コースに参加しました。北京で生活するのは初めてです。中国の南西地方―重慶生まれの重慶育ちですから、北方に来て違和感がたくさんありました。しかし、短い間でこちらの生活にすっかり慣れました。辛くてあぶらっこい味を好む私ですが、1ヶ月すぎると塩辛い食堂の料理を美味しく食べるようになりました。ピンポンを楽しみながら研修に励んでいます。1971年生まれで、研修コースで最年少なので、皆様にかわいがってもらっているというより、あれこれやらせていただきました（もちろん喜んで）。ホームシックになった人もたくさんいますが、まだ若いせいか久しぶりの学生生活を楽しんでいます。教師をやるより学生の方が楽で、できたらもう何年間か学生でいさせていただきたいくらいです。

王保田　江蘇理工大学

1958年ハルピン市生まれ。ただし、3才の時、父が農村に下放されたせいで、へんぴな村で小学、中学、高校を過ごしました。それで名前も「田舎」に関係づけました。でも、日本語と縁が深くなっているのはそのおかげでしょう。「四人組」が打倒された後、10年ぶりに大学入試の権利があったけれども、習った英語を全部先生に返してしまいました。それで、父にイロハから教えてもらって、独学で一年間勉強しやっと合格しました。1985年6月ハルピン師範大学卒業、1988年6月江蘇理工大学で日本語教師として仕事をしています。いままた学生生活に戻って嬉しいとともに、何となく慣れないような気がします。それでも、入学式で小熊所長のおっしゃったように、日本語と日本文化を教える教師になるために力を尽くしていこうと思います。

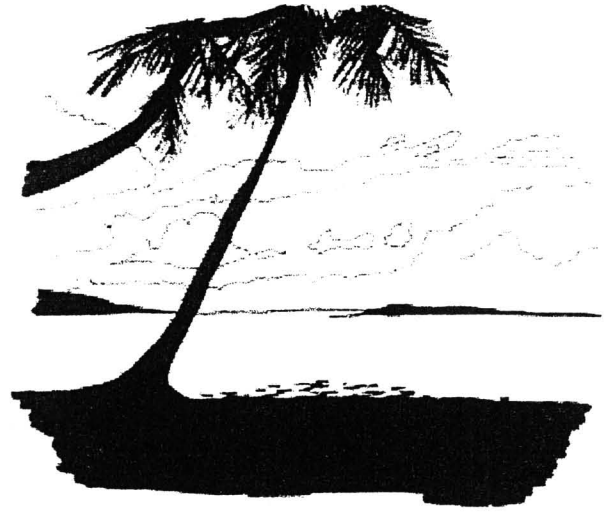
朱潔　広西大学

広西チワン族自治区の南寧市にある広西大学からまいりました。1970年11月、　西省西安市生まれ。1992年に西安外国語学院を卒業して、教師としてその学校に残りましたが、結婚のために1993年5月に広西大学に移りました。23年間住んでいた故郷の西安と別れて3年になりましたが、とても懐かしいです。今、第二の故郷の南寧も好きになりました。夏はとても暑くてストーブのようですが、冬はたいへん快適です。南国的な果物の名物はマンゴとかパパイヤとかザボンなどで、みなおいしいです。日本では「盆と正月が一緒にくる」ということわざがありましが、今年、自分にはめでたいことが二つありました。一つは、広西大学で一年かかって諸先生と共同で翻訳した日本語の「頭の体操」（多湖輝著）という全十六集が広西人民出版社から出版されたことです。もう一つは、今度北京日本学研究センターへ研修にきたことです。北京は初めてですから、あちこち名所見物をするとか、北京の人の生活を見るとか、おみやげなどを買うことが楽しみです。また、センターですばらしい先生方にお教えいただけてありがたく思っています。

于華　青島大学

西安生まれの西安育ちですが、中途半端な西安人です。父は青島の人で、母は上海の人です。日本語とは何の因縁があるのかわかりませんが、1984年西安外国語学院に入学するとき日本語を選びました。海が大

好きだから、1994年に南開大学の大学院を卒業して、西安を振り向かずに、すぐに青島へ飛びだしました。今は青島人になろうと夫と二人で青島での生活を楽しく過ごしています。音声に敏感なのか、言葉の研究が好きです。歌も好きです。特に日本のエスニックな演歌は大好きです。非常に魅力的だと思います。人生には好きなものやことが多ければ多いほど幸せだと思います。したがって、今回の研修で皆さんのことが好きになれれば大成功だと思います。



季愛琴　河海大学

南京の河海大学からまいりました。蘇州の近くにある小さな町一張家港市生まれ。南京大学外国語学部日本語学科を卒業して、中日合弁会社で2年間社長秘書及び通訳を担当しました。1993年10月、今の河海大学に移りました。昨年センターの十周年シンポジウムに出た時、ここの図書館を見学しました。その時、ぜひまたここに来なければならないと自分と約束したので、今年の研修コースに入学したのです。中日合弁会社の通訳を担当した時、中日文化の相違をこの身で実感しました。そこで比較文化に興味を持ち始め、これから勉強しようと思っております。

肖小麗　広州外国語学院

梅州市生まれ。1983年7月に広州外国語学院に入って4年間勉強しました。1987年7月に卒業以来ずっと第二外国語の日本語を教えています。大学時代の成績はまあまあでしたが、日本語は勉強すればするほど難しいので、自信を持っていませんでした。このたびセンターで勉強できて嬉しくてたまりません。このチャンスを大切にして、自分の日本語のレベルをあげようと決心しました。北京は初めてです。広東省から来ましたので、どうしてもここの生活には慣れません。家族は夫とかわいい女の子一人（五才）。日本語は難しいけれど面白いですから、将来、自分の子供にも日本語を勉強させたいと思っています。趣味は小説を読むことと散歩です。

俞賢淑　遼寧師範大学

出身地は遼寧省の撫順市。大学院を出て母校の遼寧師範大学に残って、教鞭をとりました。実は、日本語を勉強するのは不本意でしたから、最初は日本語が好きではありませんでした。喜ばしいことに、時間が経つにつれて興味がわいてきて、日本語の背後にある日本の歴史、文化などにも興味を持つようになり、日本に関するものなら何でも関心を寄せています。卒業してからも教師という仕事をしているから、キャンパスを離れたことはないが、今回は学生の身分でキャンパスで勉強し生活していて、以前に味わえなかった雰囲気を感じとっており、再び青春時代にもどったような感じがします。今回センターから研修のチャンスを与えられて、日本から派遣された先生方に講義を受けることができ、とても貴重に思っております。半年は短いが、時間を大事にして充実した学生生活をすごしたいと思っております。

楊永娟　哈尔滨工程専門学校

中国の北方都市ハルピンからまいりました。ハルピン生まれのハルピン育ちです。趣味は旅行とスポーツです。1986年ハルピン師範大学の外国語学部の日本専攻卒業。ハルピン工程専門学校に専任講師として勤め、もう十年間日本語を教えています。北京日本学研究センターの諸先生と日本の先生方にお会いできてたいへん嬉しいです。こんどの研修期間に日本の社会、文化、教育、生活事情などの分野について、できるだけ理解するつもりです。また諸先生について、生粋の日本語の勉強をし、専攻に関係がある研究をしたいと思います。勉強の合間に祝祭日や休日を利用して、北京の名所旧跡の見物もしたいです。

裴凱巾　遼寧工学院

1953年11月遼寧省生まれ、遼寧省錦州市在住。女らしくないと言われるかも知れないけれど年齢を秘密

にしない。工作機械工場で8年間働いたあと1978年10月遼寧師範大学に入学した。クラスで年が一番上。1982年に卒業して、もうすぐ14年になる今年このセンターにきた。またクラスで一番上。どういうわけか分からないけど、よく年齢制限ぎりぎりで「終列車」（もちろん自分にとっての）に乗る。これが運命か。趣味は読書。静かなところで一人で静かに好きな本を読むのは最大の楽しみだと思う。愛読書は中日両国の近現代のエッセイ。特に人生の悟りを語った類の文章を一番愛読する。根が率直な性格で、ときどきまっすぐに物を言う。だから、日本語の曖昧な婉曲な表現は今でもよく理解できない。主人と娘と三人で平凡な毎日を楽しんでいる。「賢妻良母好教師」が私の追求。

李明華　広西師範大学

広西師範大学からまいりました。東北の遼寧省に生まれ、東北で20年あまりの生活を送りました。1988年に大連外国語学院を卒業すると同時に広西桂林市に配属されて、日本語教師になり、あっという間に7年が過ぎました。故郷の雪世界はいつも私の自慢の話題です。私の第二故郷は緑の山、澄んだ水、めずらしい洞窟や素晴らしい岩石で有名な桂林です。もし桂林へいらしたら案内させていただきます。3人の家族で、わが家は日本語とは縁が深く、主人は桂林市で活躍する日本語ガイド、4才の子は日本のアニメーションに夢中になって簡単な日本語の挨拶もできます。残念ながら、桂林で雪景色を見ることはできません。だから、時々冬休みに子供をつれて、北方の雪を楽しみにまいります。今度、北京日本学研究センターで教えていただけることを心から感謝しています。いい先生になるために頑張りたいと思います。

金順女　吉林省延辺教育学院

私の出身地は吉林省延吉市で、少数民族です。名前だけですぐ分かるように朝鮮族です。日本語は吉林省延辺大学で学びました。大学を卒業して、ずっと日本語の教師をしております。主な担当はヒアリングです。中学校と高校で日本語を教えている先生方に研修の形でさらに日本語を教えます。学生の年齢は25～45才位です。趣味といえば音楽を楽しむことですが、その中で日本の演歌も少しできます。今度、初めてセンターで研修することになりましたが、今まで聞いたことも見たこともない知識を学ぶことができ、ありがたく思っています。このチャンスを逃さないで、一生懸命勉強して、将来、立派な日本語の先生になります。

陳虹　遼寧省阜新石炭工業学校

1989年に中国鉱業大学を卒業しました。勤め先で公共日本語を教えています。教えている中で、自分の知識が不足していることを感じました。ですから、北京日本学研究センターで勉強することは絶好の機会だと思っています。学校へ戻ったとき、私はここで学んだ知識を学生に教えてあげます。家族は3人で、主人は建築工程師、子供は5才で毎日幼稚園に行っていますが、かわいいけれどいたずらっこの息子です。私の趣味はいろいろあります。例えば、旅行するとか（山に登るのが最も好きです）、切手を集めるとか、スポーツの中で特にバトミントンなどです。

白如純　遼寧省錦州医学院

1968年12月9日、北鎮満族自治県生まれ。少数民族の満州族の後裔ですが、残念ながら満州語はぜんぜんできません。1990年7月、東北師範大学外国語学部を卒業してから錦州医学院に入って日本語教師になりました。教鞭をとった最初は22才の若者でしたので、専門の学習と研究が足りなくて、23年間むだに流れてしまいました。1994年の「平成6年度中国大学学院日本語教師研修コース」をきっかけに、また、修士号を取得して現在博士を目指している家内（医者）の励ましのために、最近、なにかを発現したいという野心を抱いてがんばっています。

彭玉屏　湖南省湘潭市湘潭大学

今度北京日本学研究センターで教えていただき心から感謝しております。私は1956年3月24日生まれで、ここで40才の誕生日を迎えました。「男人四十一枝花、女人四十豆腐滓」ということばがあります（注：男性は40才になってもよい年だが、女性は40才になったら豆腐滓みたいな人間だというたとえ）。けれども私はそうだとは認めません。なんと言っても最後まで（息があるかぎり）頑張っていきます。私は少数民族の土家族です。出身地は湖南省、湖北省、四川省の隣接する山岳地帯で岩沖というところです。土家族は言語的にはシナ・チベット語系に属します。ただ、固有の文字がないので、昔から書面言語としては

漢語が通用していました。私は小学校に入る前には漢語が話せませんでした。今は特に不自由は感じませんが、漢族のひとほど上手に話せないことをたびたび痛感させられます。

初めて日本語を学習するとき感じたのは、日本語は下の例のように土家族の言葉と同じように述語が一番最後にくることです。それで、私は楽しみに勉強してきました。

例：Ko　na　tõie（主語+客語+述語）　：土家語
　　彼は 私を 呼ぶ　：日本語　（葉徳書著『土家語研究』より）

10年前「おしん」というテレビ・ドラマが中国で放送されました。その中の日本の昔の村の生活習慣・風俗から履き物、背負う物まで土家族と似ています。もし、日本で長く勉強するチャンスを得たら、私は昔の村の様々なことについて調べ、土家族との異同についても研究したいです。また、土家族の文化、風俗習慣を紹介させていただきたいです。

大学院生

言語コース

趙衛華

1987年に山西大学に入って日本語を勉強してから9年目です。それは決して短い時間ではないので、「あなたの日本語はじょうずですね」と言われます。しかし、日本語が少しだけ話せる人に対しても、そのようなほめ方がされます。そして、私も日本語を勉強し始めてからたえずその言葉を耳にしてきたのです。このごろはかえって聞かなくなりましたが、最初のころ「じょうず」しか聞き取れなかったころよりはだいぶじょうずになっただろうと思っています。しかし、やはり思ったとおりのうまさにはなっていないと自覚しつつ、頑張らなければと思います。

李萍

1973年3月15日生まれ、今年は23才です。出身地は四川省の自貢市ですから、辛いものに慣れていました。1991年に四川外国語学院に入り、4年間の勉強を終えて、北京日本学研究センターにまいりました。大学のクラスメートたちはみなアルバイトで結構忙しそうですが、私はただ毎日図書館に通ったり、先生方の授業に出ているだけなので、幸せに思っています。北京の風と新しい生活、勉強になれるように頑張りたいと思います。

張興

1971年陰暦8月26日の生まれで、出身地は江蘇省の楊州である。楊州は古くから日本と深い関係があるから、これは私にとって日本語との関わりの第一の機縁と言えよう。小学5年生の時『日本民間故事選』を、値段が高かったけれども買って読んだが、今でも桃太郎や浦島太郎の話をよく憶えている。これは第二のきっかけである。さらに、もともと理科生であったが大学に入ってからは日本語を専門として勉強を始めた。これは第三の契機となる。今はセンターの言語コースの一年生で、毎日忙しくても充実している。段々魅力的な言語に興味を持つようになった。

李偉

山東省生まれです。子供の時とてもいたずらで、まわりの人たちにいやがられました。小学校に入学してから、ほかの子供より早く学習の重要性を知るようになり、毎日本を読んだり宿題をして過ごしました。大学の4年間は青島で楽しく過ごしました。卒業のとき、求職と同時に大学院を受験したところ意外にも合格し、北京日本学研究センターに入学することができ、あこがれの北京にやってきました。ここで一番楽しいことは先生方の授業でいろいろな知識を学べることと好きなテニスができることです。今とても忙しいですが、充実した毎日を楽しく過ごしています。

文学コース

張文穎

吉林省通化市に生まれ育ち、長春市の東北師範大学で日本語を専攻しました。勉強すればするほど日本語の難しさを感じ、その一方で日本語が好きになりました。3年生のときに日本文学と出会いました。日本の小説が中国のものとはだいぶ違うのでなかなか理解できず、日

本の小説はみな面白くないというレッテルをはったこともありました。しかし夏目漱石の小説、とくに「こころ」のおかげで、偏見がすっかり変わりました。そのうち日本文学と離れられなくなり、縁かもしれないと思い、このセンターに入りました。どのように中国人の立場で日本文学を研究していくのかが一番大きな課題だと思いますが、若さと根気でこれからの道を開こうと考えています。

韓晏元

1971年12月に海南島に生まれ、大学に入るまで島を一度も離れたことがありませんでした。18年間も小島に閉じこめられていたので外の世界を見たくて、大学の昇学志願書を書き込んだとき躊躇なく北京の国際関係学院を選び日本語学部で4年間の学生生活を送りました。それまでに習った外国語は英語だけで、日本語には全くふれたことがありませんでした。94年7月に大学を卒業しましたが、社会に出て自分の日本語が足りないことをしみじみ感じてまた勉強しようと思い、翌年日本学研究センターの入学試験を受け、運良く望みが叶いました。専門は日本文学です。宮沢賢治と張天　との対照研究をやりたいと思います。

趙力偉

北京生まれ、北京育ち、北京師範大学卒業。北京を離れたことは一度もないぐらいなので、同級生に「旅したところで一番遠いところはどこ？」と聞かれたとき、しばらく考えてから、房山県あたりかと答えたことがある。井蛙同然の私には、この目まぐるしく変化していく現実世界より、古典文学における非現実の世界の方が、時代遅れの心を打ちやすいようだ。詩人なんかになろうはずもないのに、詩と歌の世界に最も惹かれた。美文をめでること、美景を楽しむこと、美食を味わうこと、美人に恋すること（多くの場合片思いにすぎない）などが大好きだ。要するに私はあらゆる美に対して神経過敏。今、和歌と美を探求する中世歌論について研究しようと思っている。

陳宏

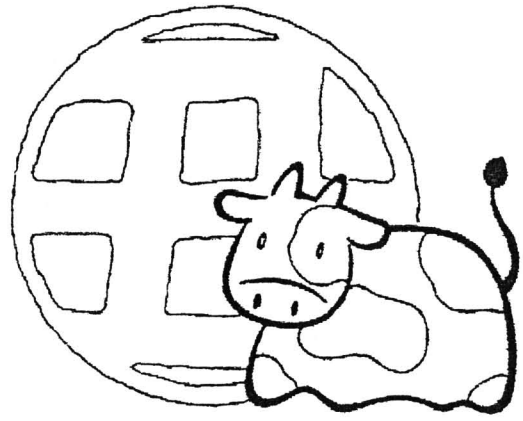
出身地はクラスで一番北にあるハルピンですが、弱虫だから北京の寒さもこたえます。大学4年生の時、最後の学生時代の時間を費やしたくなかったのでセンターの受験のために一生懸命勉強しました。結局合格してしまって、センターの一員になりました。ポピュラー音楽を聞いたり小説を読んだりすることが好きですけど、だんだん時間がなくなったので、自分の趣味が何かということも忘れてしまいました。

厖光華

四川省重慶市の出身で、1968年6月19日に生まれた。北京外国語大学日本語学部を経て、北京日本学研究センターに入学した。専門は日本文学だが、日本文化、言語学、中国文学・文化・歴史にも多大の興味をもっている。わたしは、文学を文化的・言語学的な方法でも研究したい。日本で中国学の諸分野においてみられる見事な業績には心底から感心する。日本人学者がなしとげた学問的功績を中国の学問研究に役立てていきたい。

林暁

1973年12月25日（陰暦）の生まれです。牛年だけれども、牛のような強い体格も力も全然ない。身長は164センチあるが、体重は45キロしかない。だからいつも「風中の弱い柳」と言われ、両親にもよく心配させている。それに、古代暦で牛のことを「丑」（現代中国語で「醜」の意）と言われたせいか、私は確かに美人ではない。経験と言えば、6才からずっと平凡な学校生活を続けてきているので、乏しくて蒼いというほかない。小さい時から文学と縁があるらしく小説を読むのが大好きだけれど、本格的に文学と縁を結んだのは本センターに入ってからのこと。修論のテーマにあえて古典文学を選んだ。しかし、まだ分からないことばかりなので、先生方のご指導をお願いしたい。



文化コース

唐権

1969年6月7日生まれ。私は1980年まで重慶市に住んでいたが、父が転勤したため北京に引っ越し、それ以後北京で暮らしている。趣味はとても広いが、碁と麻雀が一番好き。スポーツはテニス、バトミントン、水泳などをときどき。日本の芸術などの伝承に興味がある。例えば碁の場合は四大家族（本因坊、安井、井上、林）があって、その中に傑出する内弟子が跡目つまり後継ぎになる。絵画でも狩野派があり、室町時代から宮廷画家として数百年も栄えた。思想家でも幸徳秋水が中江兆民の内弟子であるなど。これは日本特有の制度だろう（日本の「家」制度と関係が深いから）。

何瑋

長い歴史と文化財に富んだ古都--西安で生まれ育ったものです。西安外国語学院で日本言語文学を専門として勉強しました。4年生の時に、日本史の先生がやさしく教えて下さったおかげで、その時から日本史上における各時期の文化について興味を持つようになりました。個人的な趣味と言えば音楽です。ロックのような激しいリズムはなく、緩やかでまるで川が静かに流れているような曲が好きです。特に、悲しい時や悩んでいる時に、そんなメロディーを聞くうちに、音楽と一体化する感覚は私にとってはこの上なく素晴らしいものです。時々カラオケの練習もしています。

刁榴

1973年12月3日、広西チワン自治区の小さな県--霊山県に生まれました。ただし、所属はチワン族ではなく、漢族です。ふるさとで小学校5年間と中学校6年間の勉強を終えました。それから1991年山東省済南市にある山東大学で4年間日本語を勉強しました。現在、16世紀ごろ来日した宣教師に関心があります。宣教師は初めて日本に西洋文明をもたらしたが、幕末や明治の西洋文明の導入に比べ、軽視されがちだからです。

劉粉麗

西省の生まれ、育ちです。西北地方の黄土高原で育ったため、素直で明るい性格です。他人と容易に親しくなると同時に知らないうちに友達の気持ちを傷つけることがしばしばある。また、「この人は思いやりが乏しい」とよく言われる。そんなことで喜んだり悲しんだりして日々が過ぎてしまった。1991年9月に北京の北方工業大学語言学部を卒業し西安にもどってある学校に勤めた。しかしもう一度大学で勉強したいという気持ちが生じてきた。恋人も西安交通大学を卒業して北京で仕事をすることになったので、センターの院生になりたいと決意して、仕事をしながら受験勉強をした。そして、去年9月に実現した。今度の冬休みは私にとって特別な意味をもった。それは、私は生家の娘から他家の嫁にかわったことで、生活の一切も変わった。たとえば、朝寝坊は絶対いけない。しかし、まだ慣れない私にとって家事はつらいことはつらいが、自分の新しい役割を面白く演じているのも事実である。

張彦麗

北京生まれですけれど、北京人らしくないと言われます。大都市の子にしてはやさしいと言う人もいるし、北京なまりがない、顔やスタイルが南方の人に似ていると言う人もいます。私の血液型はO型です。「O」の字のようにまんまるくて、特別な才能なんか何ももっていません。特色がないからこそ、A型やB型、AB型の人からいろいろ勉強する便利さもあります。この便利さを利用して、毎日楽しく勉強しています。そして、勉強しているうちに個性も強くなってきました。趣味と言えば、映画、音楽、絵を描くことなど若い女の子の好むものなら何でも好きです。短い青春の中で、より豊富な人生を経験したいと思います。

社会コース

鄭成

24才、未婚。小学生の頃は数多くの夢があった。例えばサッカー選手になりたいとか、パイロットになりたいとか。でも十数年間の教育を受けたあと、何になりたいのか分からなくなってしまった。だから今、日本学研究センターで先生方の講義を受けたり、図書館で好きな本を読んだりしながら、もう一度自分の夢を確実につかもうとしている。さて、僕の趣味は相変わらず写真を撮ること。ずっと没頭していたが、冬休みに「写真だけでなく、世の中にはいろんなものがある。もっと自分の視野を広げ、多くのことを勉強しな

さい。」と年輩の方から教示を受けた。その言葉で目が醒めた感じで、しばらくの間、写真をやめて学業に専念しようと考えている。いま特に関心があるのは日本の生産性の高さ。一人の日本人の生産力は70人の中国人に当たる。なぜそうなったのか、現在の鄭成はこの謎を解けない。

寞心浩

私は一人っ子なので両親に甘やかされ、22年間ずっと蘇州に住んでいました。大学まで順調に進学しましたが、つまらなく感じて、思い切って郷里から離れて北京日本学研究センターに入学しました。象牙の塔の外にある多彩な世界について好奇心や興味を持っているので社会コースを選びました。はじめて家族と別れての北の都会での生活ですが、日本からいらっしゃった先生方や中国各地から集まってきた仲間たちと一緒にいるので、毎日楽しく過ごしています。趣味は切手の収集です。切手を通して外国の事情がわかります。すでに十数カ国の切手を集めました。今は日本の教育に関心があります。日本の経済発展は教育の力に負うところが大きいと考えるからです。

文俊

四川大学から参りました。5才の時からずっと学生で、もう15年も勉強したのに今も飽きていない。勉強が好きなのもあるが、学生という身分の気楽さが最も重要な原因だろう。社会的責任から逃れられるし、好きなように生活できる。大人になっていない大人というものかな。もともとは日本文学がたいへん好きだったが、社会についてもっと知りたい、日本社会を研究するのも面白いんじゃないかと思い、社会コースを選んだ。実はセンターに入ったとき、日本社会についての知識はすごく乏しかった。本当は今もそれほど詳しくないが、全身でそれを知りたいという意欲はある。

張建華

故郷は安徴省で、大学は上海外国語大学です。卒業後6年間、雲南省昆明市にある雲南省土産進出口公司に勤めまして、その間、92年に社内結婚したわけです。28才になってまた勉強するなんて、といつも冗談半分に言われますが、自分なりの考えがあって、この道を選んで歩いてきたのです。というのは、外国語は一つの道具であって、この道具を利用して、外国のこと、具体的に言えば日本のことをいろいろ勉強していかなければ、日本語がどんなに達者であっても、あまり意味がないものだと思っているのです。

張雲暁

1972年生まれ、ふるさとは四川省広安県です。小さい時よく黙って何かをやってしまうので、将来人の体にメスを入れる外科医になるかなと、両親に思われましたが、高校に入って理科が案外不得意で、結局北京師範大学日本語学科に入りました。語学のほか日本の社会にも興味を覚え、社会コースに入って見聞を広めようと思いました。今関心があるのは日本の環境問題で特に琵琶湖の水環境です。中国にも共通した問題があり、身近に感じています。

編集後記

春が足早に過ぎ北京がすっかり夏の装いに変わると、春学期も残すところ1カ月となってしまいました。忙しく過ごしているうちに時が流れ、このセンター通信の発行も遅れ、今回は52・53号の合併号となってしまいました。今号は従来の通信と全く趣が変わり、河野先生の自己紹介を除くと、すべて学生・研修生・卒業生の寄稿です。訪日体験と自己紹介の他、中国事情特集として6編をまとめました。卒業生や学生のみなさんの豊かで率直な感性が文章によく表現され、中国の現実の一端と若い人たちの頭の中にある中国像を教えていただいたような気がします。短い自己紹介の文章でも、全員のが揃うと、それぞれに個性があり、全体として大変面白い記録になったように思います。

事務主任の畔上さんの自己紹介は今号でも見送りになってしまいました。常々事務に提出すべき書類が遅れがちという編集担当の個人的負い目があり、彼女に無理に原稿提出を迫るより原稿催促の状況を維持しておいたほうが得策と考え、強く要請しなかったということもあります。情報によれば、彼女は日本で看護婦さんをしていたことがあり留学中に中国人男性と恋をし結婚した、というあたりまではわかっています。

さて、編集担当者（稲村）は長期派遣でしたが、次号で最後となります。次号は派遣教員の寄稿を中心にまとめたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。